

最高学部

Erasmus+でのポメラニアン大学訪問

最高学部 咲花昭嗣

最高学部は 2016 年にポメラニアン大学（ポーランド）と交換協定を締結した。これを受けて、学生の相互訪問交流が始まり、国際交流プログラムとして充実を図っている。これに加えて、2023 年度には Erasmus+ プログラムによる教員・学生の交流の機会を持つことができ、教員・学生それぞれ 1 名がポメラニアン大学を訪問した。

1 経緯

2016 年 12 月に矢野恭弘国際化センター長(当時)がポメラニアン大学を訪問し、最高学部とポメラニアン大学の交換協定が締結された。これは、学生と教員が相互に訪問し交流することを推進するためのものである。これを受けて、学生グループの相互訪問、また最高学部からは 2 名の学生が短期留学としてポメラニアン大学を訪れている。

今回はこの交換協定ではなく、EU によるプログラムで訪問することが許可された。この「Erasmus+ (エラスムスプラス)」は、欧州連合(EU)が教育、研修、若者、スポーツに関するプログラムとして 2021 年から 2027 年まで実施しているものである。このプログラムは、世界中の高等教育の学生、スタッフ、機関に対して EU 加盟国の大学と EU 外の大学との学生・教職員が互いに大学を訪問するための資金援助等を行っている。

学生に対しては「Student Mobility Program」(SMP)があり、所属する大学が協定を締結している場合、学位課程の一部を(2~12 ヶ月)ヨーロッパの大学で過ごすことができるものの、教員については「Staff Mobility for Teaching Assignments (STA)」があり、高等教育機関に所属する教員が加盟する海外大学にて相互に教育活動(講義、ワークショップ、ゼミ活動等)を実施するものである。

当初、私の訪問は 2020 年 3 月 23~27 日を予定していたが、1 月 30 日に WHO がコロナ緊急事態宣言を出し、3 月には EU が渡航制限および国境封鎖を実施したことにより延期することとなった(日本の非常事態宣言は、安倍晋三総理大臣によって 4 月 7 日に 7 都府県に発令、16 日には全国に拡大)。

その後、日本国内でのコロナ禍が落ち着きを見せ始めた 2022 年 6 月に実施を検討していたが、2 月に始まったウ

クライナとロシアの戦争により、ポーランド国内も混乱が広がったことや日本とヨーロッパ間の航空便も大幅に削減されたことなどから断念することとなった。そして、再再調整をへて 2023 年 10 月に実施できることとなった。当初の計画から 3 年半もかかってしまったことになる。

2 訪問の概要

このプログラムでは、派遣期間5日間で最低8時間の教育または研究・研修活動を実施することが条件になっている。今回の訪問では、2 回のレクチャーと大学式典出席をそれらに充当させることになった。

Erasmus+の規定では、教育・研修のために 5 日間、移動のために前後 1 日ずつの計 7 日間の日程となっている。今回のポーランド訪問はさらに 7 日間を追加して、今後の学生研修旅行の下見のために国内を視察することにした。全行程は以下のとおり。

10/5 午前中出勤 23:40 成田発(約 14 時間)

10/6 6:20 ワルシャワ着 乗り継ぎ(約 5 時間) 12:00 グダニスク着

10/7 レクチャー準備 グダニスク市内見学

10/8 Vlad 先生の車でポメラニアン大学寮到着

10/9 レクチャー①9:40-11:15 Marek Lukasik 副学長と会議・ランチ

10/10 エラスムス関連手続き(エラスムスオフィス、ポーランド銀行) ウスチカ(バルト海)見学

10/11 レクチャー②8:50-10:20 Maria Aleksandrovich 教授(教育学)とランチ

10/12 最高学部文化社会論オンライン講義(6:40-8:00)

大学式典・記念音楽会・夕食会 10:00-22:00

10/13 スウブスク市内見学

10/14 7:20 高速鉄道でクラクフへ(6 時間半)
10/15 ヤギェロン大学・日本美術技術博物館“マンガ”
館・ヴァヴェル城見学
10/16 アウシュヴィッツ博物館見学(中谷剛さんガイド)
10/17 難民支援ホステル訪問 14:01 高速鉄道でワルシャ
ワへ(2 時間半) ショパンピアノコンサート
10/18 最高学部会議(オンライン)8:30-9:30 ワルシャワ蜂
起博物館 22:30 ワルシャワ空港発(約 12 時間半)
10/19 19:00 成田着

3 プログラムの内容

3-1 レクチャー①

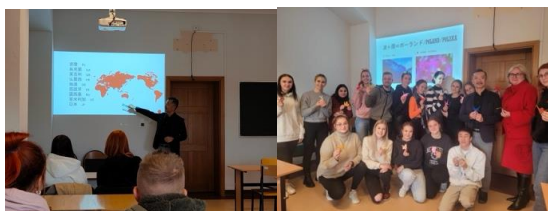
テーマ「Why don't Japanese people take off their masks?」

対象:教育学部 2 年生 14 名

- ・自由学園の紹介
- ・漢字で書くポーランド(波蘭)
- ・絵文字の違いに見るコミュニケーション
- ・日本の教育で協調性が育まれる訳
- ・「同調圧力」と教育・社会
- ・Origami ワークショップ

この講義では、自由学園の紹介の後、日本とポーランドの関係や文字を通して両国の文化を比較することから始めた。ポーランドの漢字表記は「波蘭」となり、学生たちに書いてもらうことで異文化に触れる体験をしてもらった。

また、「真面目で勤勉」という日本人に対するイメージが教育とどう関係するのか、協調性と同調(圧力)は表裏一体であることと日本社会のこれまでの出来事(例えば、コロナ禍が落ち着いてもマスクをする人が多い理由)のつながりを説明した。



受講した学生からは、日本の学校で生徒たちが掃除することに対して賛否の意見が出され議論になった。また、生徒が料理や自治活動をする自由学園は、日本の学校の中でどのように見られていると思うか、という質問もあった。

3-2 レクチャー②

テーマ「What is the value of education in Japan?」

対象:教育学部 2 年生・教員志望 2 年生 24 名

- ・日本の近代教育
- ・教員養成システムはどうなっているか
- ・「知・徳・体」と学校教育
- ・東日本大震災と学校
- ・Origami ワークショップ

この講義は、将来教員を希望している学生対象だと事前には知らされており、日本の教育システムや教育改革について話してほしいとリクエストがあった。また、前回のレクチャーで私の拙い英語では伝わりにくい面が多々あったため、パワーポイントは自動翻訳で英語→ポーランド語に変換したところ、学生の理解は少し上がったと感じた。

前半は近代教育の変遷と教員養成のポイントを説明し、後半では学校教育が果たす役割について説明した。特に、災害が多い日本において、安全教育がどのように行われているか、「津波でんこ」を例に東日本大震災と学校教育について話した。これは、隣国ウクライナで戦争が続いているポーランドの学生にとって、非常時に学校に何が求められるか、そして生徒学生たちが将来に希望を持つために教員がすべきことを考えるために選んだテーマであった。



学生とのディスカッションでは、生徒学生が個人として自立することが教育の大切な目的であるか、ということにさまざまな意見が出された。賛同する意見が多くあった一方で、今のウクライナの現状やヨーロッパが抱える問題を考えると、他者と共存し協調することを学ぶ必要があるのではないか、という声も上がった。

3-3 大学式典

ポメラニアン大学は学年歴が 10 月～翌年 6 月のため、今回の滞在中に新年度スタートの式典が開かれた。このアカデミックイヤーに合わせて「フル規格の大学」(学部と大学院が完備された大学)に昇格したため、その祝賀セレモニーも兼ねたものであった(それに伴い、「アカデミア」から

「ユニバーシティ」に正式に呼称変更となったようである。

ポーランド国旗と大学旗が入場し、ポーランド国歌斉唱で開幕。学長のスピーチでは、ポーランド政府に公認されるまでの経緯や新しい展望、キャンパスの改修など、新しく出発する大学のイメージが語られた。また、国際交流提携をしているカザフスタンやウクライナの大学代表団、スウズク市長、地方議員の祝賀スピーチ、新任教員紹介などが続いた。

自由学園からは、ミセス羽仁の「思想しつつ 生活しつつ 祈りつつ」の額(複製)をオサドフスキー学長に進呈した。



その後は、新年度記念講演会、音楽会と続き、学長・副学長・海外大学関係者によるディナーと、10:00から始まって22:00過ぎに終了するセレモニーであった。

このセレモニーに出席していたウクライナの3校の大学関係者から、自由学園が提供した「自由学園スカラシップ」(ボメラニアン大学に留学してきているウクライナ人留学生のための奨学金)に対する感謝の言葉を多くいただくこととなった。中には涙みながら「私たちの学生がこの奨学金を受け取り、どれだけ励みになったか。遠く離れた日本の自由学園の皆さんがウクライナに心を寄せていることに感動しました」と述べられた学長もおられた。

4 ポーランド国内視察

ボメラニアン大学での日程を終えて、後半 7 日間はポーランド国内を視察してきた。これまでに2回、学部生の研修旅行を実施してきているが、その行程を参考に以下の見学を行なった。

- ・グダニスク:旧市街、連帯博物館
- ・クラクフ:アウシュヴィッツ博物館、旧市街、シンドラー記念館、日本美術技術博物館
- ・ワルシャワ:ショパン博物館、ワルシャワ蜂起博物館

その中から、2ヶ所について述べる。

4-1 アウシュヴィッツ博物館

クラクフ駅からバスで 1 時間半ほどの距離にある博物館である。公認ガイドとして唯一の日本人である中谷剛さんのガイドツアーを予約し、当日は 20 名ほどの日本人見学者とともに博物館を見学した。

第一収容所は当時の建物を使ってさまざまな屋内展示があり、またガス室が復元されているなど、当時の実態が丁寧に視覚化されていた。各自が持つ無線機を通して中谷さんのガイドを聞けることで、非常に生々しくまた壮絶な歴史に触れる機会となった。

連絡バスで 15 分ほど移動した第二収容所は、有名な引き込み線路と広大な敷地に並ぶ建物跡、証拠隠蔽のため爆破されたガス室の残骸など屋外展示博物館になっていた。



中谷さんのガイドは、見学者に対して常に問いを発しながら説明するスタイルで、歴史的出来事を今の自分に引き付けて考えることを求めているように思えた。これは学部生に是非とも経験して欲しいプログラムである。

4-2 ウクライナ避難民ホテル

出発の直前に読んだ「婦人之友」2023 年 10 月号に、クラクフでウクライナからの避難民を支援する友の会会員の記事が掲載されていた。全国友の会中央部に連絡したところ、すぐに対応してくださり、幸運にも訪問することができた。

古谷浩子さん(横浜友の会)がボランティアをされているのは、クラクフ旧市街からすぐの場所で、5 階建てのホテルには 120 名の避難民・難民が生活されていた。ここはポーランド人が中心になって活動をしているウォルノナム財団が運営しており、戦争が始まった 3 日後には建物をヤギェロン大学から借り受けたという。古谷さんは、何か行動を

しなければと思い立ち、全くツテのないこの財団に日本から飛び込んで活動を始めたとのことだった。

ホステルを訪問し古谷さんとお会いして、財団の担当者に伺ったところ、特に子どもたちへの戦争の影響は大きいとのことだった。広いところで遊んだり体を動かすことがほぼなく、ポーランドの幼稚園や学校に通い始めても、いじめに遭い不登校になってしまうケースが多いと話されていた。



今回は 1 時間ほど、ホステル内にある「幼稚園」で子どもたちと遊んだり絵を描いたりしたが、スタッフや一緒に避難してきている家族も女性ばかりのため、男性と体を大きく動かすことにとても喜んでいて。この様子を見て、担当者は「戦争のために男性は避難できないことで、小さな子どもたちは父親の記憶を重ねているのだと思う」と話され、戦争と子ども、戦争とジェンダーの問題が目の前にあることを実感させられた経験であった。

5 学生向けプログラム

今回の Erasmus+では、教員だけではなく、学生にも 1 名の枠を得ることができた。

学生向けのプログラムでは、半年間の留学で 21 単位以上取得することが条件となっている。また、奨学金として

往復渡航費用 1500 ユーロ

現地滞在費用等 2400 ユーロ

授業料 免除

*往復渡航費用ならびに現地滞在費用等不足分は自己負担
となっている。

学内で希望者を募ったところ 3 名から手が上がり、学部教師会の審査の結果、内藤悠太さん(4 年)が選ばれた。



内藤さんは、10 月からの秋学期(～2 月)にポメラニアン大学に在籍し、語学(英語)・ポーランド語)、社会学、心理学、批判的思考などを履修し、単位取得した。

現地から定期的に送られた報告書から。「12 月初旬現在、相変わらず思ったことを英語で表現することに苦勞し、高校英語すら満足にできていない自分に心砕かれる毎日だが、良い友と先生に恵まれ、努力すれば確かに進める環境だと思うので、もっと真正面から、食欲に過ごせるよう心がけています。一番好きな授業は批判的思考 講師 Katarzyna Zychowicz(90 分)。童話を題材に、物語に散りばめられた教訓や時間をかけて形を変えていく内容から、現在の私たちはどう捉えるか、という授業。とにかく先生が迫力のある女性で、一言一言に重みのあるゆったりとした独特な口調。最近はマレフィセントのオリジナルがレイブ紛いな行為をプリンスがしていたことを挙げ、議論し、容姿に関する刷り込みや、男女の役割についても、深めた。收拾がつかなくなってもおかしくない内容だが、この先生だから成り立っているのだろう。良い授業をとった。しかし、テストは難しいから覚悟しとけと初回に言われ恐怖している。」

学部 4 年になるまで、あまり積極的に世界を広げることをしてこなかったということだったが、ゼミ担当教員の後押しもあり、今回の留学を経験できたことは非常に有意義だったと話していた。

Erasmus+は毎年必ず応募枠が与えられるものではないが、チャンスが与えられれば教員・学生ともにチャレンジしてみると良いだろう。今回の訪問にあたっては矢野恭弘先生、早野曜子先生、ポメラニアン大学の Marek Lukasik 副学長ならびに Erasmus Office のスタッフの皆様にご感謝申し上げる。